

「本能寺の変」を調査する

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

天正10年(1582)6月2日早朝、明智光秀が本能寺に滞在していた織田信長を急襲、自刃に追い込んだ「本能寺の変」は日本史の中で最も有名な事件の一つです。紅蓮の炎につつまれて焼け落ちる建物の中で、白無垢の袖姿の信長が奮闘する場面は、映画やテレビで演出されて時代劇を代表する見せ場となっています。また、研究者や小説家・信長ファンによる変の要因や経過をめぐる論説は数え切れません。

その一方で、遺跡としての本能寺のようすはほとんどわかっていなかったのですが、2007年夏から冬にかけて3回にわたって本能寺跡の発掘調査を行なうことができました。遺跡の調査成果から本能寺の変に迫ってみましょう。

本能寺は創建以来、さまざまな事情により京都の町中を転々と移動します。現在の本能寺は、豊臣秀吉の命令により天正19年(1591)に寺町御池に移転したものです。本能寺の変の時は北を六角小路、東を西洞院大路、南を四条坊門小路(現在の蛸薬師通)、西を油小路に囲まれた場所にありました。境内には本堂のほか多くの建物が造られ、法華宗の本山の一つとして栄えていました。

の調査 本能寺の東部中央、西洞院大路に面した位置にあたり、



「能」の銘をもつ軒丸瓦(の調査)

「関西文化財調査会」が担当しました。調査では北側から延び、西に向かってL字形に折れ曲がる堀が見つかりました。南北方向の部分は長さ8m以上・幅4m以上、東西方向の部分は長さ12m以上・幅約6mで、ともに深さは1m以上あります。南北方向の部分の西側には、2m以上にわたって高さ

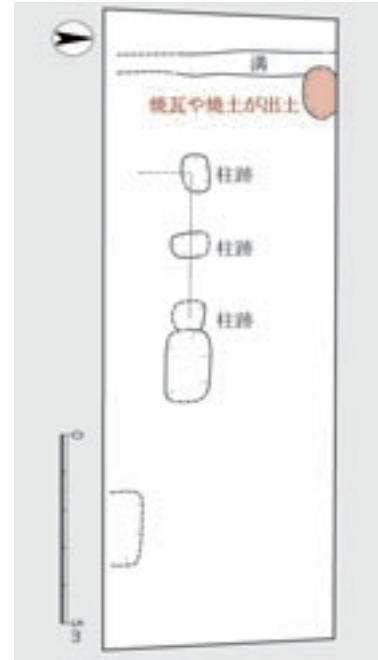
0.8m以上の石垣があり、ひとかかえ程の大きさの石材を3段以上積み上げていました。これらは本能寺の内部を区画する堀の一部と考えられます。また、堀の埋土からは仏教道具の輪宝を頭に戴いた鬼瓦や本能寺の「能」の異体字「能」の銘をもつ軒丸瓦などの遺物が大量に出土しました。



本能寺の調査位置(~)



写真の中央に礎石を据える根石（ の調査・東から）



左写真の平面図

の調査 本能寺の中央部北西寄りにあたります。調査では握りこぶし程の大きさの石のまとまりが、東西方向に3基並んで見つかりました。柱を立てる礎石を据えるための根石と考えられます。柱跡のさらに西側には南北方向の浅い溝があり、建物の軒先に位置する雨落溝である可能性があります。北側には柱跡がないことから、建物の北西隅にあたることがわかります。また、「能」の銘をもつ軒丸瓦や炎を受けて赤く変色した瓦や焼けた壁土が出土しました。本

能寺の変で焼失した建物の屋根瓦などを捨てたものです。

の調査 本能寺の南東隅にあたります。調査のようすがテレビ番組で紹介されたことをご存じの方も多いと思います。調査では四条坊門小路北側に沿って東西方向の堀が見つかりました。幅2m以上・深さ約1mあり、本能寺の南堀と考えられます。

まとめ 発掘調査からわかったことを整理します。本能寺の周囲は堀で囲まれ、内部も堀によって区画されており、一部には石垣

を積み上げていました。境内の中央部には礎石をそなえた建物がありました。瓦葺きの建物があり火災で焼失しました。また、これらの遺構は16世紀末には埋められて整地が行なわれます。ちょうど本能寺が寺町御池に移転する時期です。

このように、文献の記録が裏付けられた一方、境内が複雑な構造であり、建物の配置など未解決のままの問題も多く残されています。「本能寺の変」の検証はまだまだこれからです。（山本 雅和）



焼けた瓦（ の調査）



焼けた壁土（ の調査）